

令和3（2022）年度後期
授業評価アンケートの結果と分析及び提言
—PDCA サイクルに向けて—

教養教育院総務委員会委員長
岩田 貴

目的

大学教育に関しては、教育目的・目標の明確化やその到達度、さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために、学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。第3期中期計画・中期目標を達成するためにも学生と教員の双方に対してアンケートを実施し、双方向のPDCA サイクルを確立し、徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

実施方法と時期

令和2年度と同様にすべての授業科目群を対象として期末のみに実施した。分析結果はプログラム評価委員会による授業改善へのフィードバックを行うこととした。令和3年度後期も、新型コロナウイルス感染防止のため後期は遠隔（オンライン）授業が推奨され、9月頃から徳島県では第5波がみられ、後期の授業は遠隔（オンライン）授業を余儀なくされた。さらに夏季休業後からは次第に落ち着いていたが、遠隔（オンライン）授業が多い状況が続いた。今回のアンケートは全授業を対象に期末アンケートを令和4年1月13日～2月9日に実施した。教員に対しては、授業実施報告書の提出（令和4年3月末まで）として実施した。通常のアンケート項目に加え、遠隔授業でよかった点と不都合の有無を尋ねる項目を自由記述式で追加した。

結果と分析

1) 回収率

令和3年度から従来の8科目群が再編成され4科目群となった。後期の期末アンケート回収率は48.15%であった。前期の64.75%から低下し、昨年度後期の平均値44～65%と比較してやや低下傾向が見られた。また、科目群による差も認められた。後期期末アンケートを行った275授業題目のうち、回収率が50%未満であったのは169授業題目（61%）にのぼり、一方、回収率が60%以上であったのは69授業題目（25%）であった。各科目群の平均回収率（令和2年度後期）は教養科目群（42.23%（44%））、創成科学科目群（39.75%（48～62%））、基礎科目群（44.8%（53%））、外国語科目群（49.61%（50%））であった。単純比較はできないが、令和2年度の再編成前の科目群と比較しても各科目群の回収率は低下していた。前期に比べて後期の回収率が低い傾向は、過去に科目群をグループに分けて実施していた時と同じである。前期末に続いて2回目のアンケートであるため、回答による授業改善のフィードバックが感じられないと判断した学生は回答に積極的ではなくなると推測される。現在、授業評価アンケート結果の分析及び提言は、教養教育院ホームページに掲載しているが、アンケート結果そのものは公開されていない。回収率低下はオンライン授業によるアンケートの説明不足が原因の一つと考えられ、各教員に周知徹底を依頼しているが、改善は見られていない。回収率向上のためには、アンケートを期末テスト開始前に必ず実施するなど、ある程度の義務化の検討は必要と思われた。さらに得られたアンケート結果を授業担当教員、学生ともに効果的にフィードバックする方法を継続的に検討する必要があると思われる。授業評価アンケートは学生の皆さんが受講された授業題目に対する正当な評価で、みなさんの意見を授業に反映することができる手段の一つであるので、回収率向上にご協力い

ただきたい。

2) 教員の授業に対する取り組みについて

アンケートの自由記述欄には、具体的な授業実施方法とそれについてのコメントが詳しく書かれている場合が多く、各教員の授業への取り組みや工夫を知ることができる。教員の授業内容や方法等について、自由記述のコメントから代表的な意見を例示する。良かった点として「まとめやすかった」、「事前開設のスライド、レジュメ、授業スライドといろいろなコンテンツを配布して下さったため、理解しやすかった」、「映像や資料が多く分かりやすかった」など遠隔授業が導入されたことによって伝達方法に広がりが見られるようになったことに対する評価が高かった。「オンデマンド授業であったので、何回も見返せて理解が深まった」、「授業の初めに遠隔授業のみと指定してくれたので、振り回されることがなかった」など、対面授業とオンライン授業が混在する時間割にもかかわらず、教員も学生も慣れたことによって昨年度のような混乱は少なくなったようである。一方、改善してほしい点としては、「グループワークなど少し交流できるようなワークがあればよかった」、「次の授業が対面授業のため、感想を書く時間が短くなり急いで大学に向かうことがあった」「せめて教員は顔出ししてほしい」、「課題の配布、提出、連絡はmanabaなどに統一してほしい」など遠隔授業特有の改善点もあった。また、遠隔授業に対する良かった点として、「リアルタイムであったり、オンデマンドであったりと授業の受け方が様々あり、自分に合った方法を選べた」、「対面授業の時のように席の関係でスライドが見えないことがない」、「Jamboardを活用してグループワークが円滑にできた」などがあつた。

遠隔授業に対する改善点の例として、特に外国語科目で「授業中の音声聞き取りにくい（音割れ、ネット環境が原因等）時があつた」、「オンライン授業を大学内で受講していると声を出せない場合が多い」などという意見が多く、科目特有の問題点も上がられた。

語学の授業では少人数クラス編成となるため、同じ学科・コースで異なるクラス間の授業実施方法や成績評価基準が異なる場合がある。昨年度はそのことを指摘する意見が多数見られたが、今年度は授業実施方法や成績評価基準のクラス間格差に対する意見は非常に少なかった。

3) 学生の授業に対する意識

これまでのアンケート結果と同様に、学生自身の受講態度は評価が高く、自学自習時間は短い傾向にある。自宅学習を促す授業も多く、各教員が工夫していることに対して様々な反応が見られる。授業の実施方法の一つとして、e-learning (manaba)を利用する授業が増加し、その利用形態も多様化しつつある。教員がオンデマンド形式の授業を活用することで、学生は自宅での復習が反復して可能である。今後は反転授業を促すようにオンデマンド形式の短編コンテンツを作成して、予習が進むことを期待したい。復習を促す方法として受講後のレポートを課す授業が多く、「それぞれの授業でレポートが出されるので大変」、「レポートを提出する方法が教員によって異なるので、manabaに統一してほしい」などのコメントがあり、できるだけ混乱させないような工夫が必要と考えられた。

遠隔授業が一般化して利点と欠点が明らかになってきたこともあり、学生からは感染対策のため遠隔授業を継続してほしいという声が多い一方で対面授業を望む意見もあり、受講者の考えが異なる場合も多い。対面授業を望む意見としては、「対面授業が可能なら、実際に研究室の中で体験形式の授業を受けてみたいと思った」、「対面授業の方が理解が進むと感じた」、「(遠隔授業は)質問しにくい」などがあつた。

4) 受講環境について

令和3年度後期も、新型コロナウイルス感染防止のため後期は遠隔（オンライン）授業が推奨さ

れ、前期終了頃から徳島県では第7波がみられ、後期の授業は遠隔（オンライン）授業を余儀なくされた。さらに夏季休業後からすぐの10月下旬からは第8波が到来し、BCPレベルは1にならない状況が続く遠隔（オンライン）授業が多い状況が続いた。令和2年度のオンライン形式の授業における問題点として、自宅でのWi-Fi環境の脆弱性に起因する通信障害があげられていたため、本学では大学で遠隔授業を受講できるようにWi-Fi環境の整った教室を含めたスペース確保した。このような環境下における遠隔授業に学生・教員ともに慣れてきたのもあって、自由記載ではオンライン形式では「通学・キャンパス間移動が不要で時間の余裕がある」「集中できる」「感染の不安がなかった」「自宅では周囲に遠慮せずに声を出さることができる」「自分のPCで見るので（資料や映像が）見やすい」、オンデマンド形式では「何度も繰り返して視聴できる」「自分のペースで勉強を進めることができる」など肯定的な意見が見られた。一方で、自由記述欄の改善要望において、前期に見られたようなはオンライン授業を黙々と受講して一人で孤独に課題に取り組む学生の不安などはほとんどなく、遠隔授業を自宅で受講することによる孤独感を解消するような工夫、例えばチャット機能やブレイクアウトルームでディスカッションを行うなどが定着していることが推察された。講義室の環境に関する記述は一部の授業ではWi-fi環境の充実に加えて他者に気を遣うことなく発語できる環境を整えてほしいとの記述もあり、さらなる環境整備の検討が必要がある。

総括

全科目群で中間アンケートを省いて期末のみ一斉実施としたことで、今回は令和2年度に続く2年目で、今年度から従来の8科目群が再編成され4科目群となった初めての後期のアンケートとなった。回収率が前期よりも16.6%低く、昨年度後期の平均値44～65%と比較して低下傾向である。授業改善への学生の意識が全体的に低下していることが伺われるとともに、本アンケートは授業に対するフィードバックであるということを教員も意識してほしい。学生のアンケート自由記載の端々から、教員の臨機応変な対応や授業実施方法の工夫が読み取れる。一方、このように大きく変化した学習環境への対応に教員も学生も苦労している様子も見られる。特に教員と学生及び学生同士のコミュニケーションが不足しがちな状況を改善する必要は十分認識されており、工夫もみられる。今後も引き続きアンケート等を活用して、改善のサイクルを進めていくことが重要である。

提言

1. 学生は教員が独自に工夫した実施方法をしっかりと評価し、改善してほしい点も評価方法だけでなく授業方法にまで踏み込んでアンケートに記載しているので、教員は真摯に学生からの評価を各授業に反映させてほしい。
2. 教養教育院としても評価の高かった授業題目の工夫されている点や、評価が低かった点について教員間で情報交換を行い、継続的にフィードバックするFDなどの場を設けたい。
3. 遠隔授業を実施する場合には、ポータル（学生からの入口）を明確にする必要がある。各授業への入口が異なると学生が混乱する恐れがあるため、可能な限り同一のポータルを利用できるように統一することが望ましい。
4. 学内で遠隔授業を受講するためのスペースやWi-Fiの充実などの物理的環境を整えるとともに、周囲を気にせずに発語が可能なスペースを設置することが望ましい。